

第2回 武蔵野市旧赤星鉄馬邸保存活用計画策定委員会 議事要旨	
日 時	令和6年10月31日（木）19:00～20:30
場 所	旧赤星鉄馬邸居間・食堂
委 員	内田委員（委員長）、小田委員、塚本委員、三浦委員、小内委員 オンライン出席：内川委員（副委員長）、阿部委員
オブザーバー	東京都教育庁地域教育支援部管理課文化財調査担当 原課長代理
事務局	総合政策部資産活用課長 ほか6名

1. 開会

（内田委員長）定刻になりましたので、第2回武蔵野市旧赤星鉄馬邸保存活用計画策定委員会を始めます。

2. 議事

（1）第1回委員会の振り返り

（内田委員長）まず、第1回委員会の振り返りについて、事務局よりご説明をお願いします。

（事務局）（資料1を説明）

（2）旧赤星邸オープンガーデン実施結果

（内田委員長）続きまして、旧赤星邸のオープンガーデン実施結果について報告をお願いします。

（事務局）（資料2、参考資料1から4を説明）

（内田委員長）参考資料4では建物に関して大事な空間をいくつかに分け、特に主人の空間に関しては空間的にも復原をして、できれば建物としての魅力を見せる場というような形で位置づけたということでした。今回の社会実験では、主人の空間は魅力的で大きな空間ですから、利用者からすると魅力的で使い勝手が良いため、保存すべき対象としている空間の扱いと利活用が当初の予定と少しずれている、それをどのように考えていくかが議論しなくてはいけない点かと思います。また、今後の実験のありようとして、有料化するのであれば今度は逆に有料という前提の中で実験してみることも必要なのかもしれない。

（塚本委員）色々な事業者が参加して、日替わりで使っていくのはおもしろいと思いました。何者ぐらいが集まってどういうふうに変化されたのか、お店の賑わい、集客力とか、事業者の意見などがありましたら、教えていただければと思います。

(内田委員長) 参加者の公募をしたときに、どの部屋を作っても良いという前提だったのかとか、水の使用について条件を出したのか、その辺も関係するかと思います。

(事務局) 来場者は1週間で計3470名でした。土曜日が900名弱、日曜日が1200名で、イベントがある土日が多い結果となりました。参加者の公募については、最低限の禁止事項は設けましたが、基本的には参加を全て受け入れる方針にしました。事業者は10者、営利目的ではない団体が7団体、個人での申し込みが6名でした。水質の懸念から水道は飲み水として使えないこととしています。また、当該敷地は第一種低層住居専用地域ですので、売り買いをする場合には建物外でしていただきました。入場料の件や、事業者の意見はアンケートの集計中ですので、次回報告いたします。

(塚本委員) 庭であれば、飲食提供ができるわけですね。

(小内委員) 現時点では(社会実験という事もあり)大丈夫です。ただし、今後公園になると、条例改正などの必要があると考えます。

(内田委員長) 夜のイベントについては魅力的な空間だと思う反面、夜まで開放して管理していくのはすごく大変なところもあって、一般的には夜は閉めていることが多いです。そのような中で夜まで使えるというのは一つの特徴になって、使い方としてはとても良いとは思いますが。市としては、夜も積極的に利用するような施設として考えているのかどうか、現時点ではどうでしょうか。

(事務局) 夜も近隣の方にどこまで許容されるのか実験したということもありました。恒常的でなくても、時々こういったこともあると良いかなと思っています。

(内田委員長) 建物に関してはどうでしょうか。確かに保存すべき空間で、復原等を考えている空間だけれども、ある程度単発的な形で使うといったことは、むしろ魅力を伝えられるだろうなという気はします。昨年度の議論の中で「復元(利用・活用)」という、その括弧のところは少しルーズに考えていくという方向でも良いのかなという気はしますが、その辺はどうでしょうか。また、建物の魅力もあるけれど、庭の魅力の方が皆さんか求めている魅力でもあるのかなという気がします。

(事務局) 今回、中に展示したものを外で売り買いするという形でしたので、外での販売の方に人が多いというのはありました。一方で、日曜日は建物の案内ツアーがあり盛況でした。建物は建物で人気はあり、人気の出方や使われ方が違いました。

(内川副委員長) 私も昨日午後3時頃から実際に現場を見せていただいた。廊下が狭いので、多くの人が入った時にどういう動線をとるか、その辺を考える必要があると感じました。先ほどからご意見が出ているように、庭の魅力というのは素晴らしいものだと感じました。2階から眺めるとか、昨日も午後は良い天気になって何もせずにま

ったりとしている人も結構多かったので、芝生の上で過ごせる空間が良いのかなという感じがしました。

(内田委員長) 建物の見学の場合には少し手狭なところもありますので、その辺のコントロールはしなければいけないということですよね。では、旧赤星邸のオープンガーデン実施結果に関しては、これで終わりにしたいと思います。

(3) 改修履歴・現況に関する調査報告

(内田委員長) 続きまして、改修履歴・現況に関する調査報告に移りたいと思います。

(事務局) (資料3と参考資料5を説明)

(内田委員長) 現状の中でオリジナルがどういう形で残存しているのか、資料3は部屋ごとの資料になるかと思います。現状の報告の方針でいいのか、もう少し別の観点から追加するようなこともあるのか、ご意見をいただきたいと思います。どの部屋を復原していくのかということで、例えば主人の空間が一番大事な空間ということはありませんけれど、一方で残存状況から見ると実は1階のトイレはオリジナルでほとんど手が入ってないので、残存状況という意味で言うと歴史的な価値がとても高いものだというような状況もあります。まずは中間報告という形で、こういう調査を進めているということをご理解いただければと思います。それから、各部位のレベルが4段階になっていますので、この4段階の判断でいいのか、あるいはもう少し厳密に分けるとというような観点があれば、ご指摘いただきたいと思います。

(塚本委員) 赤星邸の場合は色々な色を使ってないようなので必要ないのかもしれませんが、内部の塗装部分に関しては、紙やすりでこすって年輪みたいに出すやり方がありますよね。1ヶ所ぐらいはやった方が良いのかなという印象を持ちました。

(計画策定支援業務委託事業者) シンプルな仕上げの色使いですが、少し削ってみるとカラフルな色が出てきます。暖炉の上も黄色であったり、色々な色が隠されていると思いますので、図面と合わせ調査しています。年輪状に出すのは難しく、例えば、暖炉の上などで見えるのは2色ぐらいです。丸柱もコンクリートの上に布を貼って、その上に色をつけたりしています。

(三浦委員) それは寒冷紗ですね。レーモンドは得意だったので。

(内田委員長) 確かに色はとても空間を規定する大事な要素ですので、ぜひ調査をお願いしたいと思います。

(小内委員) 今回、ペンシルベニア大学の写真を初めて見て、今まで推測していたような部分が写真で改めてわかりました。当時の生活様式が分かるところとして、2箇所調べていただきたいと思っています。1つが、2階の階段の脇に配膳室が残っていて、

下階のキッチンで作ったものをダムウェーターで2階の鉄馬の部屋に運んでいたというような生活スタイルが見え隠れします。キッチンのダムウェーターはもうないですが、配膳室はそのまま残っていて、当時の暮らしを思い浮かべる中では興味深いと思っているので追加で調べていただけると良いなと思っています。もう1つが、地下のボイラー室に直接外から石炭をくべるための投入口が、礼拝棟につながる廊下の下にまだ残っています。当時、ガスが入る前に五日市街道から車で直付けし、石炭をくべてラジエーターなどの暖房の熱源にしていたという話を聞いているので、昭和初期の生活様式として注目すべきポイントかと思っています。最後に、24ページの化粧室のプロット位置が間違っているので修正いただきたいと思っています。

(事務局) ご指摘通り修正いたします。

(小内委員) この階段下の化粧室も照明等が当時のまま残っているので、ここも貴重だと思います。

(内田委員長) 確かに階段脇のパントリーがよく残っていましたね。その辺を見ていただくということでよろしくお願いします。

(小田委員) ベニヤ材というのは戦前に日本で普及していたものと理解してよろしいですか。

(内田委員長) 明治の終わりごろには新田ベニヤが接着剤を開発して、それから急速にベニヤ板が普及していきます。ただ、当初は木材よりも高級だったという話もあったりしますので、今とまた大分違うかもしれません。

(小田委員) ここのベニヤも南洋から来たものですか。

(三浦委員) これは特別でアメリカから直輸入したものです。レーモンドのインテリアはほとんどロータリーベニヤですが、この住宅に関してはメタセコイアで相当費用もかかったと思います。

(小田委員) そこが魅力になるのではないかと思います。

(内川副委員長) 蔵の網戸が日本で2番目に古いものとして残っているということで、非常に貴重だというお話を聞きました。資料を見ると網戸は当初材不明となっているのですが、当初材が残っていることとしても良いのではないかと思います。

(内田委員長) 2番目に古いかどうかは検討する必要がありますけれども、確かに初期の網戸の一つですね。新しい生活の中で、特にこんなに広い庭がある場合には、全開放したら生活に不便をきたしますので網戸は必需品だったと思います。そういうことから生活の様子が見えてくるだろうなと思いますし、その辺もぜひ調べていただければと思います。レーモンドの材料の使い方などに関して、三浦委員にもヒアリングして情報を整理していただければと思います。

(三浦委員) レーモンドは決して高級な材料を使わなかったのですが、ここだけは赤星が直接高級材をアメリカから輸入したということで使っています。レーモンドはベニヤが好きでありお金をかけなかったのですが、この邸宅は別ですね。赤星邸と川崎邸、福井邸の一連の三つの作品は高級材を結構使っています。特徴的なのは、階段のアールでしょう。川崎邸もアールですね。コンクリート打ち放しだけれども、あの時代に本実でうまく角度をつけたというのが特徴です。

(内田委員長) 他にいかがでしょうか。調査の中間報告ということですので、要望があればお願いします。

(三浦委員) レーモンドが設計した部分は分かりますが、その後修道女会が増築した部分を残すのかどうか。文化財指定する場合はそれが邪魔になる場合もありますし、その辺の調査は終わっているのでしょうか。

(事務局) 有識者会議では今後の利活用に向けて、修室棟は残すという選択肢もあるが解体して公園を広くし、新しく例えば飲食ができるようなスペースを設けるのも選択肢だと整理しています。

(三浦委員) 今回の調査はあくまでもレーモンドの設計部分ですね。

(事務局) 先ほどの参考資料4では修室棟は減築プラス改築もしくは解体という記述があり、礼拝棟に関しては保存するとなっています。最終的にどうするかはご議論いただきたいと考えています。

(三浦委員) 分かりました。基本的には礼拝棟は何かのイベントに利用でき、修室棟はどうしてもレーモンドの本体を阻害してしまうという考え方で良いと思います。

(内田委員長) 先ほどの資料で色分けされていて、薄い青は撤去を前提として考えているということです。建物全体を見る上では外観を阻害しているということで撤去というのは、前の会議での大きな方針の一つとしてうたわれているということです。

(小内委員) 2階の一番西端の SHIRINE という部屋のカーテンのフックがオリジナルであろう真鍮製のものが残っています。今となっては貴重だと思うので、コラム的に扱っても良いとは思いますが。

(内田委員長) 改めて残存状況を見る中で、復原すべき場所を明確化しなくてはいけないだろうと思います。あわせて空間をどういう形で活用していくのかに関しても、展示空間みたいなものが、おそらくどこかに必要になるだろうと思います。そういう空間をどこにするのか、少しずつ情報をもとにして決めていくことが、必要になってくるかと思っています。

(4) 文化財の価値

(内田委員長) 続きまして、議題4に移ります。事務局からご説明お願いいたします。

(事務局) (資料4 参考資料6を説明)

(内田委員長) 資料4は文化財の価値のたたき台ということになります。まず、議論していただきたいのは、この4つの大きな柱で良いのか、あるいはもう少し柱が必要なのか、あるいはこの柱の中でより強調すべきことは何なのか。改めて確認させていただきたいと思っております。

(三浦委員) レーモンドと杉山さんの最初の出会いは、聖路加国際病院のトイスラーさんの紹介だったというのは、杉山さんから直接聞いていました。聖路加国際病院でトイスラーさんという、病院長のような方がいました。杉山さんはレーモンド事務所に入りたいけれども全然伝手がなく、トイスラーさんに紹介してもらうことになった。トイスラーさんは聖路加国際病院の設計を依頼する代わりに、杉山さんは所員として採用してもらった。レーモンドと最初の出会いはそういう経緯だった。そうしたら、ものすごくできる人間で、レーモンドが一番愛したというか、そのように育っていった。ものすごく実力を発揮して東京女子大学の教会もそうですし、事務所には彼が描いた直筆の図面がたくさん保管されています。ものすごく繊細で製図はレーモンド事務所の中では一番と言われるくらいすごかった。レーモンドがこよなく愛したけれども、葛藤はいろいろありました。それから、吉村順三さんが一番彼と親しかった。兄貴分というか、兄弟のようにお互いに切磋琢磨して、戦前コンペティションも一緒に出している。二人の間に競い合ったというよりも、すごく仲が良かった。そういう杉山さんがこの吉祥寺の出身であるということが、また一つのインパクトになるのかと思います。

(内田委員長) 先ほどのトイスラーさんと杉山さんは、住まいが近くだったのでしょうか。

(三浦委員) それは詳しく分かりません。レーモンドは絶対に戻ってこいと戦後言ったけれども、戦時中に三菱地所設計で働いていたからそれを放り出してレーモンド事務所へ戻ることはできないということで、杉山さんは断ったのです。つらいけれど断ったということで義理堅い。

(塚本委員) 杉山さんが設計した大手町のビルは僕も好きですね。

(三浦委員) 名古屋駅前の大名古屋ビルもそうです。

(塚本委員) 余計なことをしない、ビルらしい、いいビルですよ。

(三浦委員) 時期が銀座の教文館と全く一緒ですよ。昭和4、5年くらいの同じ時代に世界恐慌があったわけですね。材料やコンクリートもすごく悪い時期に建てた。教文館はあの時代で鉄骨鉄筋コンクリートなので、まだ今も現存して使っています。保存している建物の中では、昭和4年に赤星四郎さんの紹介でレーモンドが設計した藤沢カントリークラブがあります。それは不思議くらい全くデザインが違う。ですか

ら、昭和4年から9年の間にレーモンドは画期的にデザインが変わっている。詳しくは私もわからないが過渡期で、そこから変わってきたと思っています。レーモンドが自分のスタイルを見つけたというか、そういう意味でこの建物は、近代モダニズム建築の最初の一つとして非常に貴重だなという気がしています。要するに、杉本実の打ち放しですね。藤沢カントリークラブはきれいに改修されて、今もほとんどそのまま残っています。昔は全部ゴルフ場だったのが戦時中は飛行場になり、その飛行場もなくなりました。余談ですが、昭和18年12月8日の開戦日にアメリカ大使とゴルフをしている記録が残っています。まだ大使も戦争が始まることを分かっているのです。

(塚本委員) 例えばプランで洗濯機をどこに置いていたのかと思いました。洗濯機は1922年に最初に輸入されたと書いてあって、赤星鉄馬はアメリカのこともよく知っていたからいち早く欲しかっただろうと思いました。そういう最初の文明の利器のコレクションがこの家で実現していたというのも多分一面ではないかなと思うので、資料があれば生活文化の近代化みたいな話も展示できたらと思います。

(計画策定支援業務委託事業者) 木造の附属屋には使用人室があり、その洗濯室には洗濯機はなかったようです。台所には電気冷蔵庫が描いてありました。

(塚本委員) オープンについては分かるでしょうか。

(計画策定支援業務委託事業者) 図面の記載はありませんでした。

(内田委員長) 電化については山本忠興さんという早稲田大学の電気学科を作った先生がいて、その方は大正11年目白に電気ホームという、ドアを電気で開け閉めができ、冷蔵庫、電気オープンなど、あらゆる電気を使ったものを作ったりしています。アメリカでは奴隷を使えなくなり家事労働を軽減するためには機械を使わなきゃいけない、要するに電化の時代に入るということが進んでいたのも、いち早く日本に導入しようということで、自分の家を全て電気で賄える家を作っています。作って生活したけど電気代が高くて結果的に維持できなくなるのですけれど。その頃からもう日本でも、先ほど出てきた電気洗濯機とかは国産で作るような時代に入ってきます。そういう意味では、多分ここにはあったのかなと想像しています。

(塚本委員) 田園調布なんかも電気を引くぞというのですごく盛り上がったのですよね。

(内田委員長) そうですね。田園調布も渋沢さんが元々電車がかったおかげで電気を引いて、それで電化できるようになって生活していましたね。

(都教育庁) 文化財的価値を考えると、ドミトリーのような生活空間の構成を住宅で実現したのはこれが初めてでしょうか。洋風と和風が混じり、家族も空間を分けて暮らしているが、全部の部屋が南側に並びへの字型で空間を作るという生活空間をどのように考えていたのかなと思いました。またモダニズム建築らしく屋上の庭園と、

テラスを作っているということもモダンな気がします、住宅建築の歴史の中ではどのような位置付けと考えられるのでしょうか。

(内田委員長) 本当に最先端のデザインですね。元々日本の建物は、ある種分棟型といいますか、建物をつないで語っていく世界ですよ。このくらいの巨大なものであれば、生活の部分とか、子どもたちの個室みたいなものは基本的に分けて設計していくのが一般的だと思うのですが、ひとつつながりというのがすごく早い事例だと思います。特に直線的じゃなく曲線でまとめたことによって、日本的な連続性みたいなものが生まれ変わりとして出てきているようなデザインの思考じゃないかなと、あくまで個人的な見解ですけども、そのように考えています。まず日本的な感覚があるのかなというのが一つです。ただし、ヨーロッパでもある程度曲線を使い始めたりするようなものは出てきますから、レーモンドのオリジナルと言うのは難しいだろうと思います。当時の建築雑誌、世界の国際建築を比較しながら、調べなくてはいけません。特にレーモンドを語る上で難しいのは、ここで書いているように世界でという話があります。レーモンドは、ル・コルビュジエをコピーした「夏の家」があります。これは日本の雑誌に紹介しただけだったら、ル・コルビュジエは知らないわけです。だからわざと出したということは、彼としてはル・コルビュジエの名前も使いたいし、それと対等に設計している自分というものを世界に伝えるにはとても良いメッセージだったと思います。海外へ自分をどう売り出していくか、ようやく始動された時期でした。そのような中でこの作品も見なければいけないところがあって、もう少し分析が必要だと思います。

(小内委員) お孫さんから直接伺ったお話として、当時家族は中玄関から出入りしていて、表玄関から入ることはほとんどなくお客さんが来たときに使うことがメインだった。また、2階鉄馬の部屋もほぼ入ったことがなく、扉から向こう側は別世界だったとおっしゃっていました。そのくらい、家族と主人の格差はものすごく違う。西側半分は廊下を挟み北側にサービス動線と南が居室になっているので一見この建物は中廊下型に見えますが、東側の主人のエリアは1階も2階も実は片廊下型です。また廊下がまっすぐだと廊下を介して見えてしまうので、曲げることで視界が抜けない視界的効果も意図していたのかなというのを感じました。

(都教育庁) 文化財的価値をどう訴えるかお手伝いするつもりで、議論を深めさせていただければと思います。レーモンドの作品群の中でも、まさにモダニズム建築に目覚める、その最初の端緒となるような建物という形で表現できますか。その当時の家族とこのクラスの方々の生活空間の平面として、西と東で違っているという空間構成の事例に特色があると言ってよいのでしょうか。また、赤星がなぜここを選んだのか、この地域に建物を建てるということ自体の社会的歴史性を、成蹊学園との関係もあわせて、どうお考えになっているのか教えていただければと思います。

(内田委員長) 成蹊学園との関係として、赤星は明治から岩崎家と付き合いがあり、鎌倉にはコンドルが設計した赤星邸があるなど、かなり強いと思います。岩崎も成蹊の敷地を持っていましたし、因縁があったと思います。しかも、震災復興で大学を作られて、特に学園都市のような形で開発し始めていたわけですね。ある種共同でこのエリアを拡大していくような意図があったのではというふうに思います。

(都教育庁) まちづくりの中でということですか。

(内田委員長) そうです。そういう意味で、まちの中でのこの立地の意味から、この建物の位置づけというのはもう少し丁寧に議論しなきゃいけないと思います。それから間取りの構成がオリジナルというのは、なかなか難しいと思います。日本の伝統的な建築の中でもその辺はもう存在していますし、例えば中廊下型でも、真ん中で扉を閉じて内と外、ハレとケという空間を分けて、ケの方に生活空間とか子供部屋みたいなものを並べていくようなプランニングというのはある程度一般的だと思います。それを多少振ったという意味では、特徴があるかもしれませんが、ゾーニングという意味で言うと、当時の考え方としてはあったのかなと思います。

(塚本委員) フラットルーフにしたことによって、分棟にしなくても良くなり外形をまず考えなくて良くなったというのが、結構大きいかなと思います。屋根をかけるのはプランニングとの対応が必要なんだけど、フラットルーフで仕上げることで平面を自由にできるようになる。これでも屋根をかけられますが、最初の発想が少し違うかなという感じがします。

(都教育庁) この建物の魅力と思われるデザインや、レーモンドらしい部分を教えていただければと思います。

(塚本委員) 基本的に家族は皆庭に面することができるのは、日本の住宅では必ずしも多くはなかったことです。必ずお客さんの部屋とかが庭側にあって、家族の部屋や納戸とかが裏側にあったりするのは日本の家の場合はあったので、家長との使い方の違いが平面で曲げたことによって隔たれているとは思いますが、それでも全員が庭に面して暮らせるという平等性を担保しているところに何か新しい考え方があるような気がします。

(小内委員) お孫さんにお話を伺ったときに、今は修室棟が南側に一部重なっていて庭が見えなくなったことは残念だとおっしゃっていたのが印象にあります。各部屋から庭が広く見えていたのかなというのは感じました。

(三浦委員) 赤星鉄馬邸がここへ来る前は、国際文化会館のところに土地があって、そこに住宅があった。関東大震災で家も形もないくらいやられて、何年かしてここで土地を開発しようということになったわけですね。その辺の経緯はよく聞いていない。

(小内委員) 有識者会議報告書の中で少し背景をまとめています。大正2年の関東大震災によって鳥居坂の自邸が半壊し、岩崎と知り合いで子どもたちを成蹊で学ばせたいということもあって、以前から所有していたこの地に来たと聞いています。

(内田委員長) 当時一つのシステムとして、手前を分譲地にして、子弟や子どもたちの住宅地として開発することがありました。成蹊が池袋から移ってきて、自宅を作って通わせる環境、今はなくなりましたが総長の建物を作り、この地で住まわせることをしていて、さらには三菱が土地分譲して住宅地開発をしましたよね。まさに学園都市づくりだったと思います。その一つの住宅がこちらだと言うように言えるのかなと思います。

(塚本委員) 当時の建具はスチールですね。製作所はおわかりでしょうか。

(三浦委員) 金物関係は全て銀座の大井工場です。昔からレーモンドの御用達で、今も規模は縮小されていますが現存しています。レーモンドの作品は未だに保管されています。商品化はされておらず、オーダーメイドです。

(塚本委員) 図面も大井工場の方で保管されていますか。

(三浦委員) 保管されています。

(内田委員長) もしそれがあれば探していただけるとよいですね。

(計画策定支援業務委託事業者) スチールサッシに関しては、作品集の中に不二サッシのパテントと書いてあります。

(内田委員長) 特許をとったのがいつなのか、わかればと思います。また、戦前の「建築土木資料集成」という冊子もありますので、参考になると思います。

(阿部委員) 先ほどの資料3について、庭について触れておいた方がよいのかなという気がしています。建築ほどの学術的な資料はあまり見つかっていないですけれども、少なくとも赤星邸に関する粗々の図面から何が読み解けるかということ、レーモンドの他の作品の図面や写真から庭の作り方の共通項とか考え方が読み解けると、残すところがどこなのか見えてくるような気がしたので、入れておいた方がよいという気がしました。

(内田委員長) 今日の議論では庭に触れていませんけれども、庭も同様に当初どのようなコンセプトで作られていたのかということと、古い樹木がどこに残っているのか、新しいのはどれなのかということのを整理していかなければいけないと思います。

(三浦委員) 庭は大体箱根植木です。あまりレーモンドから指示せずに、箱根植木から提案させていました。

(内田委員長) ある程度、庭の図面は残っているのでしょうか。

(三浦委員) 残っていません。箱根植木にあるのではないかと思います。大平さんという役員がいたのですが、その方がレーモンドと仕事をしていました。

(内田委員長) ヒアリングなどをして、調べなければいけないかもしれません。

(内田委員長) では、定刻の時間にそろそろ近づいてきましたので、文化財の価値に関しては、ここで終わりにしたいと思います。次回も続けて議論したいと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

3. その他

(1) 今後の予定

(事務局) 次回委員会は来年の1月23日木曜日午後6時半から、場所は本日と同じになります。

4. 閉会